

これは古人の読書量と今日の人の読書量と比べて、比較にならないほど古人の方が少なく、そして幅もなかったようである。というよりも、むかしは本そのものがそんなに多量には存在しなかったと思われる。

それなのに全く及びもつかないレベルに達して、その業績を渴望研究しないではいけないものがある。人生というものが期限つきなのだから、真剣に考えてみる必要がある。

どうもおのずから法を出る域まで、法に突っ込んでみる心法が秘訣ではあるまいか。本当に器用な人間は、何でも器用にやってのけることは事実である。しかもその器用が小手先の器用ではなく、鍛えた心の器用な働きなのではなからうか。

あちらを向き、こちらを見て器用に暮らすなどという浅いものことではない。この辺の消息は、通達した大先覚に俟つ以外になく、なつて、私はヘナヘナとなつてしまふのである。

古人を学ぶな、古人の学んだものを学べという芭蕉の名言もある。しかし実際には古人を足がかりにして古人の学んだものを覗くようになる。

書道のような狭い世界でも、この古人をしてここに到らしめたものは何だろうと考え、法を出て己れの書を作り卒意の際にも見られるものが出来るには、書く前に書く心をこしらえたことだろうと気づいても、冒頭に申したように、肝心な入用の時に即座の働きをしないで、後から後からと多少の援助がある実状では哀しいことである。

静かに朝のお経を誦しながら、本当に仏を拜みぬいていないのだ——と気づいた時の驚き、この驚きはみるみる幅員を拡げて書の世界にも漲っていった時の驚き、この驚きはみるみる幅員を拡げて書の世界にも漲っていった時の驚き、この驚きはみるみる幅員を拡げて書の

批判とか打算とかが先にあって信に徹しないときは、仏の慈悲も素直にいただけないほどだ。心を素直にして書道の名蹟に触れ、信

といった心境でぶつかつてみると、仏さまと呼吸の合ったように、その名蹟の真髓がこちらの榮養となつていくのに気づく。何とも悲しいことは、こんな宜しそうな精進が、まだまだ身についてこないことである。

筆を持った時には、こうあらねば——という心構えが嘘なのである。だから凡夫なのだとの隅で囁くのが聞こえる。しばらく前にオリエントと呼ばれているうちの中国と地続きである国々の書を、調べて歩いたことがある。

中国の漢字が、そしてその書が中国以外の国々に及ぼしたものであるようだし、また西域各国の書が中国に及ぼした影響も、ある時代に見られるので、その書写資料の調査をしているうちに、どの国でも金属・石・木・骨・泥のようなものに字を彫っていた間は、ペン・刀・筆の持ち方などといったものがあつたかどうかは判らないけれど、書いたままのものが遺っているようになると、いくつかの原則的なペン、筆の持ち方というものがあることが知られるのである。

ガンダーラ石仏片の中にある筆の持ち方、エジプトの地下墓室の石壁に刻まれた絵の中の持ち方、カイロの博物館にある古代書記の像に見られる筆の持ち方とその姿勢、また日本の法隆寺の広日天像に見られる筆のとり方。筆そのものも違うからでもあろうし、文字そのものの相違もあるのであろうが、いろいろの型の存在を認めることができた。

同じ中国でも時代、地方によつてはまた多少の相違があるようにも思われる。

当然のことであるが、その像に刻まれた時の文字は、その持ち方による筆で書いたものであることだ。同時に筆そのものの質なども考えてみることであつたが、国が違うとその質の違った筆で、持つ型も違った方法で、あえて他国の文字を写している場合もあるのである。日本における梵文の書き方、中国の六朝における石窟寺院のある造仏の銘などは、その例のものであると思つている。(つづく)